

敷居と畳のへりを踏まない理由は？

和室は最近では減っていますが、介護関連の仕事をしている方は、高齢者のご自宅に伺うと和室が以外に多いのではないのでしょうか。私の愛媛の実家も台所以外は全て和室です。

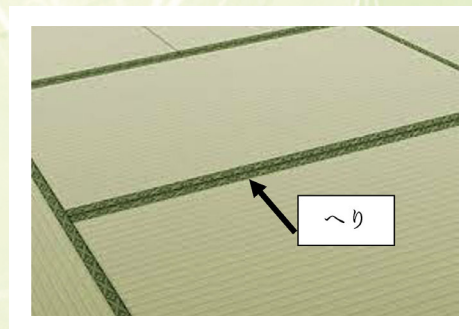
今回は和室のあるご自宅に伺った時のマナーを紹介します。

和室では、敷居や畳のへりを踏まず、畳の中心を歩くようにします。

玄関は家の顔とも言えるべきところで、その玄関の敷居を踏むという事は、その家の主人の頭を踏むことになると言われますので、敷居はまたいで入ります。

また、敷居は「家の結界」とも言われます。家の敷居から中に入ったら、相手の聖域に入っていると意識して失礼のないように振舞うことも大切です。

現実的な理由としては、敷居は日本家屋の建具の一部で、扉の動きや地震などで緩んだり歪んだりします。敷居を踏むことで、家の建付けが悪くなったり、敷居にホコリが溜まるなどして、襖や障子の動きが悪くなることもありますので踏まないようにしましょう。



畳のへりを踏まないというのは、武家社会から受け継がれた作法でもあります。当時は床下に敵が忍び込んで畳のへりの隙間から刀で突き刺して暗殺をするということもあったそうです。へりの隙間のわずかな光の動きから居場所を特定されないように、へりを踏んだり、へりの上に座ることは避けたそうです。また当時は、畳のへりは高価な絹や麻が使われ、植物で染めていましたので、畳よりも弱い素材で傷みやすいこともあり、踏まないように大切に扱われました。後に、へりに家紋が織り込まれるようになり、畳のへりを踏むことは家紋を踏む事になり、ご先祖を無下に扱うことと言われました。

様々な理由がありますが、高齢の方々はこのような「しきたり」を大切にしておられますので、訪問する側もその「しきたり」を大切に立ち居振る舞いを整えていきましょう。

